

北海道乳幼児療育研究学会 第39回研究大会
分科会2 地域療育活動

発達支援は愛から始まる

旭川子ども発達支援センターたいよう
(NPO法人地域生活支援ネットワークきらり)

瀬川 眞砂子

社会の動き

- 1958年 知的障害児通園施設「緑光学園」設立
(札幌・旭川・小樽・釧路・室蘭・函館2か所)
- 1979年 養護学校義務化 (鷹栖養護学校開校)
緑光学園児は全員養護学校入学拒否。
- 1983年 東川養護学校開設に伴い、全員養護学
校に入学した
- 1989年 北海道早期療育システム
～全道各地で母子通園センターの設立
- 1995年 旭川こども発達支援センターひまわり開設
(2022年?愛育センターに統合)
- 2003年 支援費制度
- 2007年 特別支援教育
- 2012年 児童福祉法改正
(障害児通園施設⇔児童発達支援センター)

瀬川の経歴

なぜ発達支援か？

幼児期は、人としてスタートの時期であり、人生で一番重要な時期。人はその時期に、たくさんの人に愛されることによって、人として育つ。

社会は、愛情をもって子どもの発達を見守り、子育てをしている人たちには、子育てをしやすい環境づくり等の配慮と、社会的支援が必用。

特にしょうがいのある子どもとその保護者には、愛情深い配慮が必用。

《発達支援センターたいようの理念》

【親子のアタッチメント（愛着関係）を確かなものにするとともに、全ての子どもは、社会の一員として尊重され、その子らしさが認められる社会であることを目指します。また、全ての子どもは、愛され、保護される権利が守られ、健やかな成長及び発達そして自立が図られるために、必要な良い環境が用意されるように努力いたします。】

※ 環境＝人も含まれる

長く継続できたのは何故？

1. 個人的な成功体験の記憶

～我が子と共感ができず子育てに苦戦していた母子～

- 遊びを組み立てられない子どもに、構造化と視覚支援

1枚ずつ図面を見ながら、ブロックで家や車などを作る

⇨積み木を投げて遊んでいた子ども⇨積み木を積んで遊ぶ～

- 我が子とコミュニケーションがとれず、悩んでいた保護者支援

⇨簡単なことは写真で伝えることにより、共感ができるように

～お出かけ・トイレや風呂・持ってきてほしいもの等～

- 関係機関との連携により、支援が成功した記憶

医師や保育所等との連携（会議や見学・同伴等）をすることにより、保護者が安心して相談。

長く継続できたのは何故？

2. 社会的な使命感～カッコ良く言うと～

長年、市役所の職員として、税金で生活させて頂いていた。そこで学んだことや、気になったことについては、何らかの形でお返ししたい。

一番気になったこと

～子育て支援～

- 多くの母子が、1,6健診・3健のあと 苦しんでいる！
- 母子通園センターで学んだこと…微力だが支えになろう！自分しかいない！
- 市の体制は何十年と変わらない…入口支援の重要性を実感！

～保護者との出会いから教えられて～

幼児期の子育ての苦しさと重要性について、子どもと保護者に教えられた。

⇒今できることとして、小規模母子通園…今迄の経験を活かし、親子通園をしなければならない！

今後の課題

1. 入口の体制整備

【現在】

- 健診で気になる子は「発達支援の勧め」。専門外のDrが、保護者からの聞き取りにより、「STのいるところ」へと勧める。
- 受給者証の取得⇨保護者が見学等をして利用施設を決める⇨3歳以上の未就学児は無料。送迎もしてくれる。保育所や幼稚園の中抜けて、保護者は関わらなくても、うまく利用できる（習い事感覚）。

2. 施設の認可の見直しが必用

- センター・事業・放デイ、全ての認可基準が甘過ぎる。
役割の明確化と制限。

たくさんの人に愛され、

いつでも自分らしく、

楽しく遊ぶ子ども

《たいようの願う子ども像》